

「婆沙論」の構造分析における留意点

佐々木 閑

本稿では、きわめて複雑多様にして詳細な議論の集成である「婆沙論」という論書が、一体どういう方法で作製されたのか、という問題を、構造分析の視点から考察していく。

資料情報

- ・玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』大正二十七卷（「婆沙 H」と略称）
- ・浮陀跋摩等訳『阿毘曇毘婆沙論』大正二十八卷（「婆沙 B」と略称）
- ・尸陀槃尼撰、僧伽跋澄訳『鞞婆沙論』大正二十八卷（「婆沙 S」と略称）

研究の現状

- 婆沙 H と婆沙 B を比較した場合、随所において婆沙 H の方が多量にして多彩な情報を含んでおり、婆沙 B より婆沙 H の方が成立が新しいと想定される（この場合の「新しい」とは、「発展が完了した時期が婆沙 B より後になる」という意味）。
- その一方で、本来婆沙 H のような構造であったものが、意図的に婆沙 B の構造に改変された可能性を示す箇所もあり、婆沙 H と婆沙 B の関係についてはいまだ判然としない¹⁾。

本稿の内容

1. 「婆沙論」三本の記述順序の相違に関する考察（結論：「婆沙論」はカード方式に類似したデータ処理法によって製作された可能性が高い）
2. 「この部分は、詳しくはなにになに蘊（なにになに健度）において説く」として説明を別の箇所に譲る場合のスタイルに関する考察（結論：婆沙 H には、婆沙 B や婆沙 S に比べて一層後代の、新たな編集作業の影響が現れている）

[1] まず 1 の「「婆沙論」三本の記述順序の相違に関する考察」を行う。「婆沙論」を扱ったことのある研究者ならすぐに気づくことだが、複数の「婆沙論」を比較して読むと、同じテーマを扱っている箇所なのに記述順序が微妙に違っている。「なにかの都合でそういうことになったのだろう」といった感覚で素通りするの

が常であるが、今回私が指摘するのは、そういった、個別に見ていると素通りしてしまう「たいしたことのない現象」が、実は「婆沙論」全体にきわめて高密度で分布しているという事実である。婆沙Hと婆沙Bの場合、そういった記述順序の相違は千箇所にも達するのではないかと思う。以下、その実例を一つ見ていこう。中有と趣の関係に関する議論である。婆沙Hにもとづいて梗概を作成し、他の二本の「婆沙論」と比較するために【1】【2】などの区切り番号をつけた。議論の内容は無視しても構わない。ここで考察するのは、その記述順序だけである。（具体例：婆沙H 358b；婆沙B 265b；婆沙S 519a）

- 【1】 中有は五趣に含まれるか、含まれないか。含まれない三つの証拠。
 (1) 『施設論』の文言。「四生は五趣を含み込むが、五趣は四生を含みこまない。四生のうちで五趣に含まれないのはなにか。中有である」。
- 【2】 (2) 『法蘊論』の文言。「眼界とは、四大所造の清浄色の眼であり、地獄、傍生、鬼、天、人の眼と、修所成の眼と、中有の眼である」。
- 【3】 (3) 『品類足論』の文言。（上の『法蘊論』の文言と類似）
- 【4】 中有が五蘊に含まれるとするのは尊者達羅達多評して曰く：後説（「中有は趣に含まれる」）が正しい。理由は以下の通り。
- 【5】 理由1：趣とは「到達した処」という意味だが、中有は「向かってはいるが、まだ到達してはいない」から、趣に含まれない。
- 【6】 理由2：趣は擾乱（本来所属すべき界などからはずれて存在すること）ではないが、中有は擾乱であるから、趣に含まれない。
- 【7】 理由3：趣は安住であるが、中有は安住しないから、趣に含まれない。
- 【8】 理由4：趣は果であるが、中有は因なので、趣に含まれない。
 理由5：趣の相は亀であるが、中有の相は細なので、趣に含まれない。
- 【9】 理由6：中有は二趣の中間に在るので、趣に含まれない。
- 【10】 理由7：趣は根本なる善悪業が招くものだが、中有はその加行の業が招くものなので、趣に含まれない。
- 【11】 問：中有はいずれの界、地、処にあるのか。
- 【12】 答：（ある者1の説）：地獄と天には中有はない。人、傍生、鬼では、中有のある者となない者がいる。
 （ある者2の説）：化生の有情は業が猛利なので中有はない。他の三生の有情は業が定まっていけないので中有のある者となない者がいる。
 （有余師の説）：順定受業により生を招くなら中有はないが、順不定受業

(166) 「婆沙論」の構造分析における留意点 (佐々木)

により生を招くなら中有はある。

(応作是説の説=如是説)：欲界，色界の生には必ず中有がある。無色界の生には中有はない。

【13】 問：なぜ無色界には中有がないのか。(以下，理由の内容は省略)

【14】 理由 1

【15】 理由 2

【16】 理由 3

理由 4

【17】 理由 5

【18】 理由 6

【19】 理由 7

【20】 理由 8

【21】 理由 9

【22】 理由 10

【23】 理由 11

以上，23 項目に区切った議論を婆沙 B と比較すると，その記述順序は次のようになる。

○ 婆沙 B での対応箇所の構成 (265b18-)

【1】 → 【2】 → 【4】 → 【8】 → 【6】 → 【9】 → 【11】 → 【12】²⁾ →

【13】 → 【14】 → 【16】 → 【18】 → 【20】 → 【19】 → 【22】 → 【23】

注意点：婆沙 H にある【3】，【5】，【7】，【10】，【15】，【17】，【21】が，婆沙 B には存在しない。そして【8】 → 【6】 → 【9】および【18】 → 【20】 → 【19】では，説の列挙順序が逆転している。

○ 婆沙 S での対応箇所の構成 (519a9-)

【11】 → 【12】³⁾ → 【13】 → 【14】⁴⁾ → 【23】 → 【1】 → 【4】 → 【6】 →

(「中有は不定，趣は定という違いがあるから」という独自の説) → 【5】

注意点：【11】 → → 【23】 と 【1】 → → 【5】 のブロック順が逆転している。これは，議論が逆の順で展開されているということの意味する。そして【6】 → (「中有は不定，趣は定という違いがあるから」という独自の説) → 【5】では，説の列挙順序が逆転している。

全体構造は同じでありながら，テーマの出現順序や説の列挙順序が入れ違っている。しかも重要なのは，そういった順序の相違のほとんどが，議論の本質に全

く関係してこないという点である。つまり、どんな順序であっても構わないような、そういう箇所での現象は起こっている。それが、「婆沙論」三本の全体にわたってきわめて多数、平均的に出現しているということである。こういった状況を想定すれば、このような現象が説明できるのだろうか。

考えられるひとつの仮説は、「そういった個々の説が一種のカード形式でバラバラに記録されており、それが各議論毎にまとめて保管されていた」というものである。もちろん現代的なカードがあったはずはないが、システムとしてのカードと同じなんらかの形式で情報が管理されていたと想定するのである。その「カード」なるものが具体的にどのようなものであったかは不明である。物ではなく、個別担当者毎の「人の記憶」だった可能性もある。ともかく、各教説が個別に出し入れできるなんらかのデータ処理方法が用いられていたと想定すれば、この奇妙な現象の説明がつく。「婆沙論」を編纂する者は、大枠はオリジナル「婆沙論」の流れに従いながら、議論毎にそのカード(のようなもの)を取り出し書き記していった。当然、取り出す順番が違えば記述順序も違ってくる。そしてそのデータベースには、時とともに新たな説が付加されていったため、完成時期の遅い婆沙Hには、全体にわたって多くの新説が含まれることになった。これは現段階では実証不可能な仮説であるが、上記の現象を説明するアイデアとしては有力であると思う。このような「学説・主張のカード型データベースをもとにした編纂作業が何度か行われ、それによって複数のバージョンが作成された」という状況を想定することで、単純な直線的発展では説明できない論書の形態が理解可能になるのではないかと期待している。

[2] 次にテーマの2について考察する。「この部分は、詳しくはなにになに蘊(なにになに健度)において説く」として説明を別の箇所に譲る場合のスタイルに関する考察である。これには二つのパターンがある。一つは、「この議論についての詳細は、後になにになに蘊で説くのでそちらを見よ」と言って、説明を後ろに譲る場合。二つ目は逆に、「詳細は、すでになにになに蘊で説いたのでそちらを見よ」と、説明を前に譲る場合である。「後ろに説明を譲る」スタイルを●、「既に説いた前の箇所に説明を譲る」スタイルを◎としよう。実例を二つ挙げる(どちらの場合も婆沙Sには対応箇所がない)。

●の実例：婆沙H 84a29 = 婆沙B68c12-69c22：四律儀に関する説明。婆沙Hは84a29において「業蘊害生納息の如し」として四律儀の詳説を後出の業蘊(621c29-623a12)に譲っている。一方婆沙Bは、その記述をそのままここに出してく

(168) 「婆沙論」の構造分析における留意点 (佐々木)

る (すなわち婆沙 B は同じ記述を二回繰り返している)。

◎婆沙 H 392a4-b17 = 婆沙 B 293b16 : 婆沙 B は 293b16 において、「余は広く雑毘度に説くが如し」といって、説明を既出の雑毘度に譲る。一方婆沙 H は、その記述をそのままここに出してくる (婆沙 H は同じ記述を二回繰り返している)。

以下、婆沙 H と婆沙 B が対応する部分で、こういった現象が現れる全ての場合を表記する。

H 22b	●	= B 15-16	
H 34a10-21	●	= B 23b29-24b10	
H 61b 27	●	= B 46c17-50c	
H 82b14	●	= B 67a29-b12	
H 84a29	●	= B 68c12-69c22	
H 171b6	●	= B 127c15	
H 196b5	●	= B 146c16-147a14	
H 196b16	●	= B 147a19-b6	
H 210a1	●	= B 156c16-157a1	
H 211a6	●	= B 157c29-161c9	
H 216b18	●	= B 165b9-167c14 ⁵⁾	
H 252b1	◎	= B 196b19	◎
(= S 432a23-b19)			
H 258b12-19		= B 201a2 ⁶⁾	◎
(= S 437b29 だが H に相当する文も B のような省略の指示もない)			
H 366a16	●	= B 270b21-278b9	
(= S 439a19-447c10)			
H 対応する議論欠 (370 あたり)		≈ B 282a20	◎
(S は対応する議論欠. 450b17 あたり)			
H 392a4-b17		= B 293b16	◎
(= S 463b3-464a4)			
H 対応する議論欠 (410 あたり)		≈ B 306c14-15	◎
(= S 478c11-479b25)			
H 対応する議論欠 (411a あたり)		≈ B 307c19 ⁷⁾	◎
(S は対応する議論欠. 483b2 あたり)			
H 対応する議論欠 (427c あたり)		≈ B 321a13	◎

(= S 495b26-496a8)

H 439a23-b22 = B 340c6 ◎

(S は対応する議論欠. 507 のあたり)

H 442b14 ●◎ = B 342c14-351c22⁸⁾

(= S 509b13-516b6)

H 対応する議論欠 (H442b14 で, H548a27-b10 へと譲られた部分に相当)

= B 344c12-13⁹⁾ ◎

(= S 510c だが H に相当する文も B のような省略の指示もない)

H 482a18-25 = B 354c5 ◎

H 482b29 ◎ = B 355b16

H 486c13-487a11 = B 359c3-4 ◎

H 489c20-490a11 = B 360b14-15¹⁰⁾ ◎

H 521b11-b25 = B 376b20 ◎

H 529a7-b20 = B 382a12 ◎

H 529c8-23 = B 382b2 ◎

H 535a16-b21 = B 386b17¹¹⁾ ◎

H 538a18 = B 388c15¹²⁾ ◎

H 546b11 = B 390a16¹³⁾ ◎

H 550a11 ◎ = B 390a19 ◎

(両本ともに既出箇所を指示)

H 対応する議論欠 (557a あたり) ≈ B 395c6 ◎

H 578a4 ◎ = B 414c4 ◎

(両本ともに既出箇所を指示)

この表を見ると、婆沙 H と婆沙 B の違いは明白である。婆沙 H は初めから●が数多く出現し、やがて後半にさしかかると◎が出現してくるが、それに対して婆沙 B は一貫して◎ばかりである。つまり婆沙 H は、「前半部分では、説明を後ろに譲ることが多く、後半になると逆に、前にすでに説いた箇所に説明を譲る」のに対して婆沙 B は「説明を別の箇所に譲る場合は必ず、前にすでに説いた箇所に譲る」のである。婆沙 H が二百巻あるのに対して婆沙 B は六十巻しかない。ということは、H と B の対応する部分が終わった後も、婆沙 H にはまだ膨大な記述が残っているということである。そこでその、婆沙 H しか存在しない部分での、●および◎の出現状況を調べてみると、そこには◎ばかりが現れる¹⁴⁾。

(170) 「婆沙論」の構造分析における留意点 (佐々木)

このことから、上で言った「婆沙 H は前半で説明を後ろに譲り、後半では前に譲る」というスタイルが婆沙 H の全体に渡って一貫しているという事実が確認される。

ここで取り上げている●型や◎型の「説明の省略」という現象が、もともと梵語原典にあったものか、それとも漢訳の段階で入ってきたものか、という点が問題になるが、「俱舎論」を利用することで、少なくとも婆沙 H (玄奘訳) に関しては梵語原典からそうになっていたことが確認できる。「俱舎論」にも「婆沙論」同様、説明を他所の箇所譲るという現象が多々現れているが、その部分の梵本と玄奘訳を比較すると、梵本が「詳しくはどこそこの品で詳しく説く」と言っている箇所だけを玄奘は忠実に訳しており、自分で勝手に梵本を省略することは一度もない。その箇所は次のとおり。(Pradhan: P. Pradhan: *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, Patna, First ed. 1967) 大正 29, 2c24 = Pradhan p. 7, line 9 ; 13a9 = Pradhan p. 36, line 17 ; 20a20 = Pradhan p. 57, line 7 ; 32c17 = Pradhan p. 89, line 3 ; 86c13 = Pradhan p. 243, line 20 ; 98a19 = Pradhan p. 244, line 22 ; 106a13 = Pradhan p. 300, line 20 ; 111b2 = Pradhan p. 320 line 6 ; 135c7 = Pradhan p. 395 line 17. したがって婆沙 H に関しても、玄奘は梵本に忠実であったと考えることができるのである。

他方、婆沙 B に関しては、この問題を確定するための情報がない。可能性は二つ考えられる。

1) 婆沙 H と同じく「説明の省略」は梵語原典の段階から記されていたが、ただし、それは一貫して◎型であった。

2) 梵語原典には「説明の省略」が一切なく、全文がそのまま記されていたが、漢訳の段階で◎型の「説明の省略」が導入された。

なお、「梵語原典には●◎両型の省略が記されていたが漢訳の段階で●型だけが抜かれた」という想定も可能だが、そういう意味のない操作が行われる状況というものは考えられないので除外しておく。

次に婆沙 S だが、この資料は議論を省略することがない。全文出すのである。その意味では上の可能性の 2) と合致するように思えるが、ただ、婆沙 S は「婆沙論」全体のごく一部をまとめた抄本なので、もともとが「議論を他所の箇所譲る」ということのできない構造になっている。したがって、軽々に結論を出すことができない。今のところ婆沙 S の位置づけは保留せざるを得ない。おそらくそれは、婆沙 H と婆沙 B の関連性が解明された後で取り上げるべき問題となるであろう。

さてそこで婆沙 B に関する可能性 1) と 2) だが、現段階でどちらかに決定することはできない。だが、どちらにしても「婆沙 H の方が婆沙 B よりも一層新たな改変が加えられている」ことは言える。もし 1) だとすると、次のような推定が成り立つ。●◎両型が現れる婆沙 H の形態は、「後ろを見よ」「前を見よ」といった様々な指示をしている編集者が、予め論書全体の構造を知っていたということを示している。全体構造を知らずに、「それについては後ろのどこどこで詳しく説いている」とは言えないからである。ということは、このような指示が記入された段階で、すでに「婆沙論」の全体はできあがっていたということになる。それに対して婆沙 B は、一貫して「それは既に、前出のどこどこで説いた」とは言うが、「後ろのどこどこで説いている」とは言わない。これは論書が次第に書かれつつある時に現れる状況である。書かれつつある時には、まだそこより後ろの記述は存在していないのだから「後ろを見よ」とは言えない。もし説明を他所に譲るとしたら、それは既に書いた部分に譲るしかない。当然、婆沙 B のように、常に前に譲るという形にならざるを得ない。したがって、可能性 1) を採用した場合、●と◎の出現状況から判断する限り、婆沙 B は「婆沙論」が書かれつつある時の状況を残しているのに対し、婆沙 H の方は、全体ができあがったあと、その全体像を把握した人物があらためて参照指示を記入したという推定が成り立つ。婆沙 H には、後の編集作業の痕跡が残っているのである。

他方、可能性 2) を想定するなら、婆沙 B は梵語原典の段階で内容を省略しておらず、すべての議論が記載されていたのに、漢訳者が勝手に省略型を導入したということになる。その場合、本来なにも省略していなかった婆沙 B と、●◎両型の省略型を多数含んでいる婆沙 H では、明らかに婆沙 H の方が後の編集であるということになる。1) と同じ推定が成り立つのである。

もう一度、結論だけ繰り返す

1. 「婆沙論」はカード方式に類似したデータ処理法によって製作された可能性が高い。
2. 婆沙 H には、婆沙 B や婆沙 S に比べて一層後代の、新たな編集作業の影響が現れている。

1) 佐々木閑「『婆沙論』諸本の相互関係」『印度學佛教學研究』、第 56 巻第 1 号、2007、pp.(167)-(173)。

2) ただし「欲色界であって無色界にはない」の一文のみ。

3) ただし「欲色界であって無色界にはない」の一文のみ。

(172) 「婆沙論」の構造分析における留意点 (佐々木)

- 4) 内容が若干異なる。
- 5) ここの構造には「婆沙 B の後半が兵火で失われた」という話の傍証となる情報が含まれている (詳細は別の機会に譲る)。
- 6) ここには婆沙 B の定義文の扱いをめぐる別の問題が含まれている。
- 7) 婆沙 B307c19 は詳説を雑鍵度に譲っている。だが、奇妙なことに B の「雑鍵度」には、その詳説部分がない。そのかわり「使鍵度 (結蘊)」にそれがある (B 185c-186b, H 240b-241a, S 421b-422b)。単なる誤記か。
- 8) 婆沙 H は「此中八智三三摩地三重三摩地。如後智蘊当広分別。三結乃至九十八随眠。如此蘊初已広分別。」とあって、八智、三三摩地、三重三摩地の説明は智蘊 (546b9-549c20 および 538a18-545a17) に譲り、一方、三結乃至九十八随眠の説明は同じ結蘊の既出箇所 (236b) に譲っている。八智、三三摩地、三重三摩地の説明を譲った先の智蘊 H546b9-549c20, 538a18-545a17 だが、その部分と対応する B は 390a16, 388c13 である。ところがそこで B は、説明を省略し、「使鍵度大章に説くが如し」として詳説を使鍵度に譲る。その譲った先というのが、この B 342c14-351c22 である。a, a' という同内容の記述があって、H では、a において「詳説は後出の a' に譲る」と言っているのに対し、B では a' において「詳説は既出の a に譲る」と言っているのである。B は説明を後ろに譲り、H は前に譲る、という原則が両方交差して現れているケースである。
- 9) 「婆沙論」の成立に関する別の面での重要情報が含まれている。
- 10) 婆沙 B は「広説如見鍵度見処中所説」として、説明を見鍵度に譲っているが、実際に説明文があるのは見鍵度ではなく使鍵度 (B198b15-c11) である。単なる誤記か。
- 11) 婆沙 B は「広説如雑鍵度」として詳細を雑鍵度に譲っている。ところがそれが婆沙 B の雑鍵度だけでなく、B, H のどこにもない。B の指示の間違いであるか。あるいは別の理由があるのか。
- 12) 上の H 442b14 = B 342c14-351c22 の反射形。
- 13) 上の H 442b14 = B 342c14-351c22 の反射形。
- 14) 546b14, 571b12, 616c14, 682c14, 701b1, 706b2, 787c16, 928a21, 935a19, 967a26, 973a19, 974b24, 977b9, 978b21, 982b28, 983a11, 983b21, 983c4, 990c20 など。

〈キーワード〉 婆沙論, データ処理

(花園大学教授, 文博)